日本の近代化を土台から支えた石

登録番号	第０６７号
名称（型式等）	房州石・鋸山石切り場
所在地	千葉県富津市・安房郡鋸南町
設立（竣工）年	江戸時代

選定理由

房州石は凝灰質砂岩～礫岩（れきがん）で、約 200 万年前の火山の噴火活動により、火山灰や火山礫などの噴出物が海底に堆積し、長い年月をかけて固まったものです。石材としては、本県富津市と鋸南町の境にある鋸山周辺で産出するものが古くから知られています。

房州石の石目（模様）は、切り出される地層によりさまざまな種類があり、桜目（最上質）、井桁目、刷毛目、梨目、砂目、ガリ目などがあります。石質は、軟質で加工しやすく耐火性もあるため、江戸時代から竈（かまど）、七輪、石塀、門柱、灯篭、蔵、建物の土台等に利用されたほか、横浜港の開港整備、台場の整備、皇居の造営など、東京湾岸の土木建築工事にも使われ、日本の近代化を土台から支えました。

産業としての採石の開始時期は明確ではありませんが、天保 5（1834）年の古文書には房州石屋が土留石と石灯籠を船に積んで相模国(神奈川県)まで来たことや、天保 7（1836）年の古文書には金谷村の市郎左衛門の忰（せがれ）の由蔵が間地石を船に積んできたという記述がみられることから、江戸時代後期には採石が行われていたと考えられています。

採石の最盛期は、明治 35（1902）年頃から大正元（1912）年頃までで、年間約 56 万本の石材が切り出され、金谷村では、住民の 8 割が石材に関係していたといわれています。しかしながら、大正 12（1923）年の関東大震災により各地で石積みが崩れたことなどにより、土木建築工事が次第にコンクリート工法に変わっていったため、房州石の需要は減っていき、昭和 33（1958）年の南房総国定公園の指定やその後の自然保護規制の影響もあり昭和 60（1985）年 12 月をもって採石は廃止となりました。

鋸山周辺には、丁場とよばれる大小さまざまな石切り場の跡が点在しているほか、切り出した石を丸太に滑らせて下ろした樋道跡、ねこ車（荷車）に乗せて石材を運んだ車力道、滑車のついた無人のケーブルのようなもので石を載せて運んだ索道跡などがあります。解説看板も各所に設置され、登山道とともに整備が進んでいます。また鋸山美術館別館の鋸山資料館では、房州石の採石に関わる資料を収集・展示しており、往時の採石の状況を知ることができます。

車力道

石切り場跡

石切り場跡

参考文献：『房州石　―房州石の歴史を探る―』金谷ストーンコミュニティ編集・発行